ONEPIECE~白髪の男~

すねぇく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥＰＩＥＣＥ～ 白髪の男～

【Ｎコード】
Ｎ８８８３Ｚ

【作者名】
すねぇく

【あらすじ】
空き缶を踏んで転び、不良に追いかけられ、トラックに撥ねられ・・・
死んだ俺は胡散臭い髭オヤジの目の前にいた
よく分からないままＯＮＥＰＩＥＣＥの世界に飛ばされて・・・
なんだかんだで海に出ました

序章

真っ白
そう、俺の目の前に広がるのは都会のコンクリートジャングルじゃないといけないはずだった
だが、俺が目を覚ますと目の前に広がるのは真っ白な何もない空間
有り得ない、ちょっと待て
俺は確かただの高校生だったはずだ、昨日だって空き缶をふんずけてこけて、何かぶつかった感触がしたと思ったら目の前には強面の不良さんがいて、相手が1人だから余裕こいてたら何処からともなく不良が出てきて、逃走を開始、前を見るのを忘れていたので当然信号が赤になったことなど分かるわけもなく、大型トラックに跳ね飛ばされ意識を失うといった、異常(ただ)の高校生
・・・あれ、俺死んでない？
死んでるよね、流石に大型トラックに跳ね飛ばされたら確実に死ぬ
流石にってのは気にすんな、俺は少しタフだったってことだ
だとしたらここはどこだ？俺が死んだんならきっと天国に連れて行かれるはずなんだが
まあよくある話だと俺の目の前に胡散臭い髭親父が出てきて「わしは神じゃ」とか言うんだろうなー
直後
俺の目の前に胡散臭い髭親父が出てきて
「わしは神じゃ」
とか言いやがった
「・・・うわぁ」
うわぁ、
まさにうわぁである
そうだ、きっと夢なんだ、ほら、もう少しで消毒液の香りがする病室のベッドの上にいるに違いない

「うわぁってなんじゃ、わしは神、お前人間、ＯＫ？」
「俺人間、お前変態、ＯＫ？」
「生まれてこの方神様に変態などと言った輩は初めて見た」
「それはそうと神様、ここってどこよ？俺どうなんの？」
「マイペースな奴じゃな、えーっと簡単に言うと」
自称神様はスゥ、と息を吸って
「転生」
「おっしゃー、じゃあさっさとしろ」
「あれ？驚いて？もっと驚いて？わしはお前が不幸すぎてあまりにも不憫だから転生させてやろうって言うのに」
うっせばーか、これは夢なんだ、だとしたらこんな馬鹿らしい夢なんか見てられっか
あれ？これが俺の夢だとしたらこの夢を作り出している俺は馬鹿ってことだよね？
・・・まあ、いい
「いやどうでもいいからさっさとしろ髭オヤジ、いい加減怒りますわよ」
「落ちろ」
自称神様がそう言った瞬間
俺の目の前が真っ暗になった
なんだよ、真っ白になったり真っ暗になったり
まあいいか、これで夢が覚めて現実世界に帰れるんだから・・・
そのまま俺の意識は闇へと落ちていった

第1話　無人島

「・・・ハッ！！」
目を覚ました
俺の予想していたものは、消毒液の香りと、白い天井
だが実際は違った
俺は仰向けに倒れていて、目に映るのは青い空、肌に感じるのは草の感触
近くで水の流れる音が聞こえる
そうだ、まるで自然の中に放りだされたような・・・
これが転生というやつだとしたら、もし本当に転生だとしたら
神様は俺をここに放り出したことになる
一つ言わせてもらおう
ふざけんなチクショウ
『目を覚ましたようじゃな』
忌々しいクソオヤジの声
『手短に言うぞ、お前は今ＯＮＥＰＩＥＣＥの世界にいる。そんでお前の近くに悪魔の実があるからそれを食え、名前はムキムキの実で、この世の向き・・・お前にはベクトルと言った方が早いかの、それを操れる。それとわしの情けで３歳にしておいた、感謝せい。んじゃ』
軽い、軽すぎる
神様がんじゃ、とか言ってこんな自然に３歳の子供を放置するなんて想像できるだろうか
少なくとも俺は今体験するまで想像できなかった
それとここがＯＮＥＰＩＥＣＥの世界だとかそういうのはもういい
吹っ切れた
そういえば神様はムキムキの実があるとか言ってたな
能力がまんま一方通行、最強であり、最凶である

最初ムキムキの実と聞いた時は体に筋肉が凄くついて、ムキムキになるかと思った
そうだとしたら俺は神様を一生恨む事になっただろう
ひとまず立ち上がるか・・・っと
上半身を起こして立ち上がろうとすると
コツン、と
「いてっ！！」
額になにかぶつかった
痛む額を押さえながらもぶつかった対象を見ると
何か毒々しい実があった
この時、俺は瞬時に理解した
これは悪魔の実だ、と
確か悪魔の実はこの世の終わりを感じるほど不味かったはずだ、それを進んで口にしようとは思わない
・・・ふむ
俺は悪魔の実を手にとって、水場に移動する
さらば、俺の味覚よ、しばし旅に出てもらおう
「いざ！！」
一口
もぐもぐもぐもぐ・・・ゴクン
うん
「死ぬ」
それだけ言って俺は水を飲みまくった
なにこれ！？食うもんじゃねぇよ！！こんな不味いモン食ったことねぇ！！
「ぷはぁっ！」
そのまま後ろに倒れこむ
ま、まあ、これで俺は悪魔の実の能力者になったはずだ、それもこの世のベクトルを操る能力を
扱いは難しいだろうが、この数年でなれていけばいい

・・・今思った
食料は？
見たところここは無人島なみたいだし、食べ物はどうすればいいんだろう
ガサッと
突然草むらの方から音がなった
「まさかここで虎とかなんか出てきて、俺が襲われるなんてパターンにはならないだろうな」
わざと口に出して言ってみる
瞬間
立派な爪と牙を持った虎が襲い掛かってきた
「まじかよっ！？」
突然のことなので目をふさいでしまう
さらば、俺の第二人生、１時間もせずに終わってしまったよ・・・
きっともうすぐ目の前は赤い血で染まるに違いない
・・・あれ？
全然痛くない
恐る恐る目を開けてみると、目の前には牙と爪の折れた虎がいた
・・・ああ
反射ね
どうやら俺もデフォルトで反射設定が働いてるみたいだ
だったら
「てい」
虎に一発ぶち込む
顎に俺の拳が突き刺さり、軽く数m吹っ飛ぶ
わけもなく、運動量のベクトルを虎に向けただけで、３歳程度の腕力ではそうも吹っ飛ばない
ただ、俺の反射膜に触れて折れた牙と爪、あと残ってるのはぷにぷにの肉球と大きな体
・・・ふむこいつ

食えるだろうか？
「いやいやいや！！ダメだ！！魚とかは全然ＯＫだけど流石に虎はダメ！！無理だよ！！」
などと俺が１人（といってもすぐそばに一匹いるが）で叫んでいるとズブッ、という音がした
思わず虎の方を見るとさっき折れた牙と爪が元通りになっているではないか
何だこの虎、よく見たら毛白いし
てか再生早すぎじゃね！？絶対普通じゃない！！
「全く、触れようとしたら牙と爪が折れるなんて何てチートよ？」
「は？」
なにやら
目の前にいる白い虎さんが人語を話している
それもその姿に似合わない高い女みたいな声で
・・・ハハッ、有り得ない、虎が喋るなんて有り得るわけがない
そうだ、んなこと有り得ねぇ
・・・いや、この世界なら有り得るか？
悪魔の実、そうだ悪魔の実がある
ヒトヒトの実をこの虎が食った、ってことか？
だとしたら無駄な再生機能はどういうこと？デフォなの？
俺が下に向けている視線を再び虎に向けると
そこには、白い肌で、金髪、金色の瞳の３歳ぐらいの女の子がいた
・・・あーそうか
悪魔の実を食ったのは間違いない、だが虎が人の言葉を喋れるようになったんじゃなくて、人が虎になれるようになったんだ
はっはっは、そういうことか
ひとまず、この状況をどうにかしなければ
勘のいい方はお分かりだろう、そうだ、さっき俺が目にした虎は服なんて着てなかった
そこから人の姿に戻れば、どうなる？

答えは一つ
そう、俺の目の前にいる彼女はこの場では表現してはいけない姿なのだ
率直にいいますと、素っ裸である
でも俺は精神年齢高校生、幼女の裸なんざ見て興奮なんかするわけがない
だが、どういうことか体温が上がっていく感じがする
辿り着く答えは二つ、俺の心は3歳に戻ってしまったか、もう一つは俺にロリコンの気があるか
「いっやぁあああ！！！？それはねぇ！！てかなんて格好してんだお前！？」
「んー？別に気にすることないじゃん？」
「何で！？最近の子って何でこんなに大胆なの！？いやもうこれは大胆の域を越してる！いいから取り敢えず服を着なさい！！」
「何でそんな慌ててるの？いいじゃない、同じ女の子なんだし」
「・・・へ？」
今、なんつったこいつ？
俺が女の子？有り得ない、だって下半身にしっかり前世で慣れ親しんだモノがあるし、俺は男だ
だとしたら・・・
俺は水場まで弾丸のような速度で走っていった、てか飛んだ
そして水面に自分を映し、顔を確認する
・・・ああ、無理ねぇわ
だって女みてぇな顔してんもん
髪と肌は白くて、瞳は黒く、少し大きな目、整った顔立ち
いやさ、幼かったら女の子と見間違える事はあると思う、仕方ないけどそんな事関係なしに百人に聞いて百人が「女の子」と答えるほど俺は可愛かった
自分で言うのも気持ち悪いが、許してほしい
「・・・マジ？」

「ちょっとー何もの凄い速さで逃げてんの？」
「えーっと・・・大変申し上げにくいのでありますが・・・」
もういい、本当のことを告げよう
「俺は、男」
「・・・え？」
「何なら今ここで下半身晒してもいいんだぜ？」
俺がセクハラギリギリ（っていうかセクハラ）の発言をすると
彼女の顔が驚愕の色から、段々と赤くなっていって、最終的にリンゴみたいに真っ赤になった
それと同時、彼女は俺に鋭い拳を放ってきたのである
「あぶねっ！俺がじゃなくてお前が危ない！」
「ええーい！！向こう向け！！こっち見んなー！！」
「悪かったって！！悪かったから俺に触れようとすんなお前が怪我する！！」
こうして
他に誰もいない島で3歳の子供2人が騒ぐというなんとも不思議な光景があった
ここが、俺の新しい人生の始まり

第2話　修行

うん、危ないから反射切ろうと思ったらできたよ
というわけで白髪の女の子みたいな少年です、名前はまだない
今彼女は悪魔の実の能力で半人半虎になっている
だから女性としての大事な部分はしっかり隠されている、白い毛で色々と不味い気もするが彼女は服を持ってないらしい、そもそも何でこんな子供がこんなところに？
と聞いてみると「気がついたらここにいた」らしい
これを聞いた瞬間に嫌な予感がした
だってね？俺も気がついたらここにいたんだよ？
だとしたら、彼女も転生者なのではないか？
「もしかして、お前も転生者？」
「お前もってことはアンタも？」
どうやら彼女は転生者なみたいだ
決めた、俺はこの島を転生の島と呼ぼう
「はぁー・・・アンタもねぇ・・・でもびっくりするわよね。いきなり山に放り出されるんだから」
え？山？
今山って言いました？
「ここ、山なの？」
「そうよ、山。木登ってみなさいよ、下に村が見えるから」
俺は言われた通りに木を、登らなかった
だってベクトル操作で飛べるんだもん、登る必要がない
俺は爆発的な勢いで飛んで、周りを見渡す
すると下の方に村があった、ふむ、ここは転生の山か
俺は地面に安全に着地して
「取り敢えず下りてみるか？えーっと・・・」
「そういや名前、無いわね」

うーん・・・名前、ねぇ
「じゃあ前世の名前で、私はリナ、アンタは？」
前世の名前・・・だと？
正直嫌だ、だってダサい、小学生辺りになんだ俺の名前だせぇみたいなこと思ったもん
言いたくない・・・でも今すぐ名前考えろって言われたって・・・
・・・よし、正直に言おう
「・・・ライト」
「っしゃライト、行くわよ！」
ありゃスルー？スルーなのね？別にいいざますよ
こうして俺と彼女・・・リナは山を下りていった

・・・なんてこった
原作知識はあんまりないけど、確かにここはルフィの故郷
フーシャ村だ
「・・・フーシャ村かー」
「何？アンタここ知ってんの？」
「ん？お前ＯＮＥＰＩＥＣＥ知らねぇのか？」
「知らない、ここに来る前に何かのアニメの世界って聞かされただけ」
ふむ、知らないのか
だとしたら悪魔の実を食べた瞬間びっくりしただろうなー
だってこの世界のこと知らないんだから、クソ不味いモン食って虎に変身できたんだから
取り敢えず村長さん・・・てかルフィ探そう
いや、ここは・・・会っていいのだろうか？
俺はここにいてもつまらないから海に出るつもりだし、山にこもって修行の方がいいのではないか？
それに・・・その・・・能力暴走しちゃったら何だし、しっかり実力つけてから村に下りるか

「リナ」
「？」
可愛らしく小首を傾げ俺の方を見てくる
「俺は山に戻る。リナはどうする？」
「何で！？」
俺はさっき思ったことを説明した
あれ？俺なんかヘタレみたいになってる、いや俺はヘタレか
話し終えるとリナは少し考えてから
「・・・私もついてく、1人じゃ心細いし」
ありゃ、結構可愛いとこあんじゃん
俺は少し笑ってありがとう、と言っておいた
折角目の前に安全に過ごせる環境があるにも関わらず俺達は再び山に入っていった

とはいっても
ベクトル操作なんてものは結構簡単だったりした
ベクトルの計算式なんて必要なく、ただ『地面にヒビを入れる』とイメージするだけで勝手に能力が働く
高電離気体、プラズマもそうだ
プラズマってのは超高温の気体では原子核と電子の結合が維持できなくなり、原子が陽イオンと電子に分解してしまうそれによって生じた電子と陽イオンからなる気体をプラズマってんだけど、『プラズマを作る』ってイメージしたら出来た
その際、もの凄い暴風が吹き荒れたけど気にしない
風も手に取るように操れるんだからこの能力チートすぎる
地震も起こせたりしちゃうもの、凄いよこれ
「ライトの能力って本当に滅茶苦茶よね。同じ悪魔の実の能力者なのに私のが霞んで見えちゃう」
「鍛えようによってはリナも強くなるだろ。俺のは元々がチート過ぎるだけだ」

今思ったけどムキムキの実って超人系(パラミシア)？リナのはネコネコの実モデル虎みたいな動物系(ゾオン)だろうし、俺のは自然系(ロギア)じゃないよな？
だとしたら超人系(パラミシア)だな、決定
でも確か反射には弱点があったよな、確か反射膜に触れた瞬間拳を引いて、ベクトルを逆転させるみたいな・・・
後それと関係なく強すぎる攻撃は反射しきれなかったり
・・・まあ考えても仕方ない
「そういやリナって海に出る気あるか？」
「海？あー、さっき聞いた話じゃ今って大海賊時代なんだっけ？」
3歳の子供が何話してんだって思ってるだろうけど、気にしないで
「俺は海に出ようと思ってる、んで海賊王とは行かなくても世界に名を轟かせるような海賊になりたい」
「・・・で、私にどうしろって？」
察し悪い、何で？分からない？
「だから、海に出る時着いてきて欲しい」
そうだよ、着いてきて欲しいんだよ
ここで会ったのも同じ転生者なのも安心できるし、俺としては最初の仲間として申し分ない
ルフィは海賊王になる！！とか言ってたけど、俺は別にそこまで目指してない
海賊王なんざ自分から死ににいってるようなモンだ、だったら海賊王は目指さなくていい
「・・・んー、どうしよっかなー」
「分かった、なら後4年、俺達が7歳になる時に村に降りる、そん時に答えを聞かせてくれ」
「何そのプロポーズみたいなの、まあいいわ、OK」
4年後
そう、確かルフィが7歳の時に原作は始まったはずだ
あの神様からルフィと近い歳にしといたって聞いたし、俺達も7歳になったら村に降りればいい

それまで修行だ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8883z/

ONEPIECE~白髪の男~

2011年12月28日23時54分発行